雑詠句評　松橋帆波

越えて来た青い山脈口遊む

青い山脈がキモなのだが、世代によってどのように捕らえられるかが課題。つまり、「越えてきた」を、この歌が流行した時代を指すと読むのが順当だろうが、「この歌に歌われている状況」と読まれてしまっては、句意が拡散してしまう。その辺り、一考ありかと思う。（＊1）

時々はええじゃないかと叫びたい

最近の「ええじゃないか」は富士急ハイランドの新型コースターであるが、作中のそれは江戸期のもの、ほぼ六十から七十年おきに起きた住民運動？の様相を呈した「おかげ参り」の意を含んでいる。この作品はフラストレーションの解放という意味で誰にでもわかりやすいと同時に、読み手それぞれのフラストレーションを乗せることでより広く受け入れられる作品である。（＊2）

よく笑いキノコ図鑑をそっと見る

よく笑うのが作者なのか、家族や友人なのかによって楽しみ方が違う作品。作者自身だったら「そっと」によって表される不安感画がとても面白い。家族や友人ならおなじ「そっと」に「自分が煮炊きしたキノコ」という意味が含まれていそうでこれも面白い。（＊3）

世論滔々　私も右にずれていく　　帆波

世論滔々は熟語でもなんでもない、滔々たる世論の流れを伝えたかった。右というのはタカ派と取ってもらっても、保守と取ってもらってもいい。それが良い悪いではなく、マスコミの情報の流れの中で世論が形成されていく様、テレビでも週刊誌でも事柄に対する前提・落とし所が以前に比べると右よりになってきたなという感覚。「も」というのは世論滔々に対するもので、無意識の感覚。

一人立ちを祝ってれと稲の花

「一人立ちを祝ってやれと稲の花」「一人立ちを祝ってくれと稲の花」これがどちらが判らないので、困ってしまう。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」との対比なら「や」のほうが面白いのかなとおもうが・・

仮想愛人ならば五人ほどいる

「仮想愛人」とはすごい言葉。片思いではないようだし、実態というか変な話「肉体関係」があるとも思えない表現だし・・五人というのは月曜日から金曜日までという意味か。土日は妻のためにとってあるのだろう。論じ始めると一日かかるかもしれない。

母ですか妻ですけれど女です

母・妻・女、の女性の顔が、問いかけに対する答えとして表現されている。そこから何を読み取るかだ。よくある作品と言えばそれまでだが、上五の「問い掛け文」が新しい。ただ、十七音の中に「母・妻・女」を網羅しつつ何かを表現するのは難しい。

ＳＬで紅葉狩りとは洒落てます

その通りなので、評の仕様がない。確かに洒落ています。ハイ。作者がＳＬの乗客なのか、他人の経験を聞いたうえでの感想なのか。そのあたりのヒントが欲しい。

噂などどこ吹く風の玉の輿

女子アナと有名人、スポーツ選手などとの恋愛、結婚がニュースになると「玉の輿」などと揶揄されることがある。最近は女優との結婚などで「逆玉」などという表現もあるが、本人たちはそんなことなんとも思っていないと思う。そういうことを狙って結婚するということが本当に可能かどうか考えてみればいい。ＩＴ長者などと持て囃されていても、実態は上場株式の時価総額のことであり、現金を持っているとは限らない。また、銀行が金を貸してくれないから、市場から資金調達をするという側面も知っておくべきだろう。

出払って留守居が母の夏休み

借金の取立てに対する居留守ではなく、この作品のような居留守は羨ましい限りだ。私のように逃げも隠れも出来ない仕事場にいると、たまには「キレて」こういう居留守を使ってみたいと思う。

溜飲が下がる話で盛り上がる

面白い。下五で、井戸端であったり、居酒屋であったり、給湯室であったりと読み手の経験の場に合わせることが出来るのがいい。句姿について言えば「溜飲が」を「溜飲の」と比較してみるというのは少し意地悪かもしれないが・・

父さんは娘の膝枕耳掃除

「娘」が「母」では詰まらない。「祖母」だと行き過ぎてしまう。「娘」がちょうど良い具合である。「娘」を「コ」と読ませることに対して個人的には批判的なのだが、それは作品によって表現されている空間のぜひとは関係が無いことなので、ここでは触れない。

飽食の街に増えてく青テント

一読して「もし飽食ではなかったら」と考えたとき、ぞっとするものを感じる。世の中の矛盾はすなわち、その社会を形作っている人間の心の中にある矛盾だ。青テントの意味から逃げない川柳の視点を大切にしたいものだ・

法の綱巨悪はするりすり抜ける

よくある句。「ほんとにそうだよなぁー」という点が川柳なのだが、川柳にどっぷり漬かっている人からすると物足りなさは否めない。万人が理解できる作品は句作りの理想だが、

ベテランと初心者の既視感の違いをどう理解するかが、句評・選考の難しさだと思う。

鬼の子も生んで神にもある戦さ

人は文化・風習の違いで争うこともある。まして宗教が絡むとテーゼの違いはお互いを否定するところにまで発展する。神の戦は、神が互いに争うのではない。神を信ずる信徒によって行われるものである。信心が深ければ深いほど相手の存在を否定してしまう。鬼の子、鬼っ子とは人間のことなのだろう。

あしたまた遊ぶとのこすシャボン玉

かわいらしい作品。シャボン玉の液を明日まで置いておくとどうなるのだろう？おそらくもう一度水を足すかしないと泡が出ないのではないか。そんなことは考えない子供らしさが見て取れて面白い。「のこす」は「残す」と漢字表記がいいと思う。

米研がず野菜切らずの新世帯

まな板も包丁もない生活が現実として存在している。コンビニ、スーパー、弁当屋。今では二十四時間食べたいものを食べたい形で口にすることが出来る。結婚しても外食、いや「買い食」とでも言おうか。考えられないくらい豊かな時代になったものである。

ぢぢばばのゲートボールは口げんか

ゲートボールのルールは酷い。あれはチーム戦なので、味方のボールがコートの中に少ないほうが有利なのだ。そんな中で展開によっては、打順が回ってくると「空振りしろ！」や「後ろに打て！」みたいな野次が味方から発せられる。あれで揉めない訳がない。

Gパンがバリバリ乾く敗戦忌

冗談のように本音を吐き丸い

いろいろな言葉が散りばめられすぎている感じが否めない。「ジョークを交えて上手に本音を吐いているので周りと衝突しないで丸く済んでいる」ということをただまとめただけにしか見えない。ここからもう一段の推敲が欲しいところ。

夏休み終って今は秋休み

状況というか、作者の思い、感情が見えない。下五が何故なのか。その理由のヒントになる言葉がないので、読み手によって句意が拡散しすぎるのではないかと思う。

生きている痛みいとしき命の灯

「生きている痛み」とは何か。生きているからこその痛みであるならば、痛みは生の証明になる。だからこその「いとしき命」なのか。「いとしき」に注目すれば、痛みは「病」を連想させる。そこに掛け替えのない家族の姿を見ることが出来る。美しい句であるが、美しすぎるゆえの弱さも感じてしまう。

（＊1）映画「青い山脈」の主題歌です。1949年に映画の封切りを待たず、藤山一郎と奈良光江のデュエットで発売され、爆発的なヒット曲になりました。歌詞　西條　八十作詞

(1)　若く明るい　歌声に　雪崩れは消える　花も咲く　青い山脈　雪割桜　空のはて　今日もわれらの　夢を呼ぶ

(2)　古い上着よ　さようなら　さみしい夢よ　さようなら　青い山脈　バラ色雲へあこがれの　旅の乙女に　鳥も啼く

(3)　雨に濡れてる　焼け跡の　名も無い花も　ふり仰ぐ　青い山脈　輝く峰の懐かしさ　見れば涙が　また滲む

(4)　父も夢見た　母も見た　旅路のはての　その涯の　青い山脈　みどりの谷へ旅を行く　若いわれらに　鐘が鳴る

（＊2）ええじやないかが流行したのは、慶喜が大政奉還をする少し前の夏のことでした。奇妙な囃子に乗って、踊り狂乱する人の群れが至るところで見られたということです。天から伊勢神宮のお札が降ってくるとか、仏像、仏画、果ては金塊までが降ってくるという噂がまことしやかに流れ、救いのない民衆を乱舞に駆り立てたのでした。ええじゃないかの発祥はよくわかっていません。お陰参り（お伊勢参り）の伝統を利用した倒幕派の大衆操作、破壊工作という説もありますが、真偽のほどは定かではありません。洛北郊外に幽閉の身ながら、倒幕を画策していた岩倉具視が、変装してええじゃないかの行列に紛れ込み、市中のアジトを転々としていたという噂もあります。お蔭参りに参加する者に対しては、大商人があって、店舗や屋敷の解放、弁当・草鞋の配布を行った。江戸のバブル期後の抑圧された世相の打ち壊しを避けるための「ガス抜き」の意味があったという説もある。

（＊3）ベニテングダケやテングダケが笑い茸と言われています。笑茸は、担子菌類ハラタケ目の毒きのこ。　馬糞や堆肥に生じる。　傘は径約 4cmの半球形で灰色または淡灰褐色。　ひだは黒い。　茎は白く、高さ約 10cm。　食べると中毒を起こし、異常な興奮状態

に陥ったり幻覚を生じたりする。神経毒を持つきのこで、食べると神経系統が異常に刺激され、狂ったように笑い出します。しかし、本当に笑うのではありません。食べると顔面が引きつってしまい、その表情が笑っている様に見えるのでそう呼ばれる様になったそうです。笑える成分は、イボテン酸ームッシモール。この成分に中枢神経が刺激されると、笑っているような表情になります。